

叙勲並に褒賞受賞者欄を觀て思う

清 坊 翁

今回「たつみ」第四号の御惠贈有難く深謝申し上げる。

昭和四十年年度授賞者名欄を拝見して光榮に浴された各位には深甚の御祝辞を申し上げたい。

それと同時にこの事に對し、その暈けとして聊か朴直に放談をおちまけ御寛大なる度量に於いて御反省を促し、早速御実行に進まれんことを切望するものである。

先ず貴公方は受賞された途端何を脳裏に画かれたかを御伺したい

御本人の御努力によることは申すまでもないが、神仏の恵み、六親眷属への感謝は素より社会からの引立て等に対し報恩の誠を至す御計画をお立てになつたか、是非共叙勲受賞を記念しこの際自我没却の立場から為すべき事を果し、最後の幸運、長生の秘訣を掴むことに邁進されたいと思う。

私の日夜自己反省の座右銘、禅語の「先づ与えよ」とキリストの「与うるものは幸なり」のことばを無視しての人類はあり得ないと、これが氣にかかると感し、寝つかれず人の疝氣を氣に病む次第である。人生半以上も過して来

た老生平々凡々たるあけくれではあるが、決して受賞者に対する羨望の念にかられての嘸言ではないことを御諒承願いたい。一粒の麦として拾って貰つた三世の縁に繋がる主人、先輩、同僚、後輩等の蔭の力、嘗ての激励のことば、物心の両面の温情を捧げられた無量のものには誰しも忘れるものではない。借方勘定、貸方勘定をこの際一番に整理してこれらに酬いようではないか。

われらの先輩達、辰事業の礎石を築きし方の大多数が今日、縁の下力持ちに終り、今尚生存しながらも榮誉どころか、その存在すら忘れ勝ちで認められず諸行無常の現実は人情紙より薄く痛切に憤らずにはおれないものがある。

てつとり早く報恩される道としての方策として、さしづめ卒直に叙勲の方々との話し合いに依つてその榮光、感謝の表現として是非「辰巳会館」を御計画される事が最良ではないか。(功績像に見る如く)

全国各地に散在する会員憩いの場所を鈴木発祥の地わが神戸に設

け、たつみ会員たる誇を持つもの誰も親しく自由に利用出来るものを建設することに深い尊い意義があると想つ。

辰巳会例会はもとより現世に何かの御縁により同じ一つの鍋をつついた者同志が氣がねなく再会欲談し、創始者である今は亡きお家様御主人達の大愛主義を景仰、叙勲者各位を鑑として讃えることは

中西兎喜治(徳三郎) 君を悼む

宇津木 亥 一



鈴木瓜哇会の中心的人物であつた中西君が、突如として去る三月三十一日脳軟化症で他界されましたことは、私も親しき友人にとつて感慨無量であり、心から深甚の哀悼の意を表します。

私は大正十一年夏から同十五年秋まで中西君のいるスラブヤに勤務しました。その時に育まれた友情の強い絆は連綿と続き、歲月は移り、相互の環境は転じ、仕事も違つて来ましたが今日まで少しも変わりません。

中西君は十代に早くも日沙サラ

勿論、各地に散在する鈴木マンとの交流に拍手助援をかけた行く事がほほえましいことと思う。

わが意のあるところ、拙筆の及ぶところに非ず甚だ遺憾ではあるが、今回密罪の苛責をも辞せず心の刃を友情の余り受賞の各位へ向けたままである。多謝。

(四〇・一二・二〇稿)

この間にボルネオ、ジャワ方面へ向われた辰巳会員は、同店の風貌を想起して下さるに違いありません。

大東亜勃発に際しては前以て広東に集合し、所謂山下南進策戦に従軍して、南方の事情に通ずるものとしての東道役を承り、コタバ、クルランプール、シンガポ

ルの路線を進撃しました。帰朝したが再び馬來半島へ渡り、私は同じ頃に日沙クチンへ赴任しましたので昭南市で接触しました。終戦後は尼崎市に定着し、自家独往の経営をしておりますが、事業には時に隆替あり、健康にも可否の差がありましたのは罷むを得ません。それにしても未だ十・二十年間の寿命は充分あるとも申すべき六十六才を一期として、急ぎ易世されました事は私どもには深い悲しみを齎らして余りあります。

鈴木瓜哇会では例年定期会合をしましたが、いついかなる場合にも道の遠近を問わず出席しましたし後半期には親切周到な幹事役を引請けました。瓜哇会は辰巳会へ吸収され發展的解消した形ですが、辰巳会大会・例会には殆んど出席しております。二十数貫に余る巨体で若い時は相撲の選手でしたし頗る大食漢でした。スラブヤではテニスや乗馬を楽しみました

が、大きな身体に似ず繊細な神経の持ち主で、小さいことでも氣が付き念の行き届いた方でした。友人との信義を重んじ、義理人情に厚く、また商売にも頗る熱心でした。特に高知人独自の人間味を活かしユーモアを解し、酒を嗜まぬのに適時に方言を駆使して笑わ

在ます浄土へ移転せしめられたのです。しかし、兎にも角にも私も瓜哇会に籍を有せし先輩、同僚がここ数年間に斯くも急ピッチに相繼いで、浄土ゆき新幹線に乗り込まれて取残された私も残留組はどうしたら良いのか。この稿を筆にしながらもなお卓上電話が急に鳴り響き中西君の声で某月某日午後六時、須磨池畔〇〇樓で瓜哇会を開くからと報せられるような氣がして仕方がない。それにしてもなお急ぎ浄土にまいりたき氣分も起らないのは、まだ悟り切らざる私も風俗の然らしめる処なのでしようか。

せ、私どもは沢山の方言を教えられたものです。実は中西君はスラブヤ在動中、賜暇帰朝し新妻を携えて帰任し、私どもジョンガー組を悩ました。二十数星霜を閲し、幾多の風雪を共に凌いだこの糟糠の妻、睦子夫人を昨年八月二日亡くし眞実諦め切れぬ境地に陥りました。私ども友人はこれを励まし、辰巳会や囲碁会のあるたび毎に出席を勧め、気分転換を計らせるのに努力したのですが、遂に力及びませんでした。まだ氣分が落付かぬから待てとばかりの返事でした。嗚呼天はこの好漢に命をかさず、召し上げられて奥さんの

大阪朝日神戸版掲載(四一・四・三)

鈴木商店の倒産後四十年

大正七年八月十二日、神戸市生田区相生町、国鉄神戸駅東にあった鈴木商店の東店が集まった市民に焼打ちされた。これがいわゆる「神戸の米騒動事件」だ。大正三年に米の小売価格が一キロ当り十錢六厘だったのが、大正七年には二十一錢三厘に暴騰した。怒った富山県の漁婦たちが米蔵を襲った。これがきっかけとなって米騒動が全国的に広がった。神戸では「鈴木商店が買占めをし、海外に流している」とのうわさが広まっ

て、群衆がおし寄せた。火をかけたうえ、同商店の大黒柱、金子直吉の首に十萬円の賞金までかけられたといわれる。

だが、買占めの真相は米不足を補うための政府の指定商として海外から米を輸入して倉庫に保管していたことであつたらしい。大正三年ごろ豊作続きのため米があま

あつて輸出のための買占めと誤解されたという。鈴木商店は明治十年、鈴木岩治郎が創設、神戸で砂糖商をはじめ同二十七年岩治郎の死後、金子直吉が経営して乗出して以来、しょう脳と砂糖の製造販売を足がかりに成長、第一次大戦のとき鉄船の買占めが成功してすでに財界のAクラスに仲間入りしていた。同商店にとって焼打ちはひとつのつまずきだったが、二週間後には早くも同商店は立上る。焼打跡にバラックを建てて営業を再開した。そして一通の電報が日本一の貿易商への跳躍台になった。内外各地からきた見舞電報のなかにロンドン支店長から「慶賀にたえず」というのがあつた。会社の幹部たちはびびくりしたが、金子直吉だけはひざをたいてはめた。小さな日本国内のことに目を向けては会社の発展は望めない。世界を相手にもつと貿易を伸ばすべきだ、という意味だった。

その年の十一月、第一次大戦の休戦にともなう海運界の不況と船舶の大暴落で五億六千萬円の借金ができたが、わざわざを転じて福にしようとして翌年、再び訪れた好景氣に積極的な買いつけ策が功を奏した。同商店の貿易量は飛躍的に

伸び、世界の商業市場に大手筋として知られるようになった。大正八、九年は年間取引量が十六億円に達し、さすがの三井もおよばなくなった。しかし、このときが頂点でそれから後、没落への道を歩みはじめた。神戸の一砂糖商が五十年余り第一大財閥を築いたのは、金子直吉の事業欲があつたればこそだった。金子は会社の買収、新設、関係会社への融資など、もうかりその企業には次々と手を出して経営の範囲を広げた。資金は貿易による利益と銀行からの借入金に頼った。利子の支払はぼう大になった。不況になると関係会社の設備が遊び、赤字はふえるばかり。投機的な「直吉商法」は大正九年ごろから行詰りをみせはじめた。打開策としてまたも台湾銀行からの融資に頼った。台湾銀行との関係はしょう脳と砂糖事業を台湾ではじめたときから生じた。台銀が政府の海外飛躍策としてつくられたものだ。助けも活発だった

今も昔も変わらないのは? 昭和初期漫画

